

片山 克さん・逝去

片山 克さんの葬儀に参列した我が80歳の誕生日

8月8日片山 克さんが逝去された。享年88歳。

その生涯は正義感に溢れ生涯激闘し、真実を真摯に追求する日々であった。
あまりにもドラマティックであり、拙筆をもって表現することはできません。

片山 克さんといえば、坂村真民さんのお世話役（秘書）として有名です。
共に歩んだ時期を思い、片山 克さんの真民さんへの思いの大概を書きとどめます。

片山 克さんは伊豫銀行に勤務され数々の支店長を経て伊予銀DCカード社長を歴任され
その後も経営の困難な会社にも身を投じられ、個人的にも多くの人を助けられました。

1, 1984年・片山 克さんと坂村真民さんの出会い

昭和59年、伊豫銀行福山支店から本店に転勤になる送別会の席上、福山ガスの社長から
「君は松山に戻るそうだが、砥部には坂村真民という詩人がいることを知っているか」と尋ねられた。「知りません」と答えた。それが赤貧の恥であることに気づき、松山に戻り真民さんの本を全て買い求め、むさぼるように読破した。そして詩に感動した。
本社での任務はTQCの導入であった。真民詩に「七字のうた」がある、それをTQCのスローガンにしようと決意して、5月のある日真民さんを初めて訪問して、引用の承諾を得た。片山 克さん50歳、真民さん75歳、出会いの始まりであり、2005年9月迄21年間親交が続いた。

2, 1986年・森信三先生の序文に奮起する

真民詩への共感が深まり、真民詩を広く多くの人に知ってもらいたいとの願望が日増しに強くなっていった。それに火をつけたのが森信三先生の「自選坂村真民詩集の序文」であった。

「（真民）氏の詩業の真価が広く国民の有となるには、氏の没後3、50年にかかるかと考えていたのであるが、今やこの『自選坂村真民詩集』の公刊により、おそらく20年ほどの短縮が可能となると思うのである。もしそれが読者諸氏の共感と協力によって、それらがさらに早められて、氏の生前にその微光の一端が伺えるとしたら、その慶びはひとり氏一

人のためというよりも、むしろ民族そのものにとって一大幸慶というべきであろう」（昭和41年晩秋千里ニュータウンの片隅にて 森 信三）

片山 克さん心と体に刻印されたのが「微光の一端」であり、「読者諸氏の共感と協力」の言葉であった。

3, 1987年9月・ロビー展の始まり・鍵山秀三郎氏と出会う。

TQCでお世話になった御礼をどのようにしようかと考えていたとき、閃いたのが「微光の一端」であり、真民詩を広めようと勤務中の高松支店でロビー展を開催することを決意し、1年半かけて真民さんを説得して実施した。銀行嫌いであった真民さんは肥後モッコスで容易には承諾はしなかった。（その間のエピソードは数多くある）
10月ロビー展に当時イエローハットの社長・鍵山秀三郎氏が来訪され親交が始まる。

4, 1987年12月・「詩国朴の会」の組織始める

真民さんは1962年7月から「詩国」を発刊して読者に配布していた。（第500号迄続く）
片山 克さんは、この「詩国」を読者に分かりやすく解説をした「詩国の朴」を発刊し会員を募り、読者と共に「詩国朴の会」を組織した。「詩国朴の会」会報は2005年9月迄第214号続く。

1988年11月四国新聞に「詩国」と「詩国朴の会」活動が一面で紹介された。

1989年から全国で「朴の会」が誕生する曙となった。

5, 1989年5月「念ずれば花ひらく」第100番碑の除幕、建立の始まり

全国から150名が参加して記念会が開催され、小原も参加して片山 克さんとの交流が始まる。片山さんの目標は日本国内全県への建立、更に世界5大陸への建立を目指し、同志を募り実現された。

「念ずれば花ひらく」碑の建立は2005年5月第737番迄続いた。多くは片山 克さんのお世話による。小原もイスラエル・ヘブライ大学付属植物園に第303番碑を建立した記録は「花の中の碑・平和を祈る第303番碑物語」（はじめの言葉を片山 克さんに依頼した。全327頁）

6, 1990年3月・「朴庵例会」が始まる。

真民さんの思索絶対時間（誰にも邪魔されない瞑想思索の時間、寅の一刻を前後に零時から6時位迄の時間）を守るために、真民さんとの面談を第一日曜として、開花亭の朴庵で真民さんと語る会」が先行してあったが第2回目より合流された。（諸説あり）。この頃、片山 克さんと真民さんとの間で「第2回目の男と男の約束」がなされていた。その一つは朴庵会場と真民さんの自宅との送迎を片山 克さんがすること。朴庵例会は2004年2月迄172回開催され全国の真民ファンが集った。片山 克さん夫妻は約束通り送迎をされた。（2回は海外出張のため出来なかった）この送迎の時間に真民さんは色々な話、特に秘話をされた。

個人的な相談もされた。秘書役として公的な場所には付き添うことも依頼された。

この時に合わせて鍵山秀三郎氏から朴の苗木10本が寄贈された。これを契機に全国で朴ノ木を植える運動が始まった。

7、1990年5月・「全国朴の会」第一回開催、
開花亭で第一回「全国朴の会」が開催された。全国大会は下記の通り8回開催された

回数	日時	場所	主催者
1	平成2年5月12日	砥部町、開花亭	片山 克、関連記事K-30
2	平成3年5月18日	大阪、茨城市	関連記事K-30 大阪朴の会
3	平成4年5月30日	岐阜県白川町	湘南箱根朴の会 関連記事K-54
4	平成5年5月09日	福岡県篠栗町	九州朴の会、佐賀朴の会 関連記事K-
5	平成7年5月21日	愛媛県上浮穴部	久万朴の会 関連記事K-90
6	平成10年5月17日	熊本県荒尾市	関連記事K-126 荒尾朴の会
7	平成12年5月20日	山口県	鍵山秀三郎氏 関連記事K-150
8	平成16年2月01日	松山市	片山 克氏、全国朴の会 関連記事K-196号

運営は各支部が担当、総括は片山 克さんが全国に発信して結合された。総指揮者である。

8、1991年11月・「詩国の朴」第48号（詩国第353号）に警告

真民さんを世に出した人で有名な岩野喜久代さんから「真民ファンが真民詩をダメにする」と心配される警告があった。警告は予言となった。

片山 克さんは「心して秘書を務める」と更に決意して自宅の庭に朴ノ木を植えられた。苗木の提供は鍵山秀三郎氏と小原であった。

9、1993年5月・「鳥は飛ばねばならぬ」英訳され出版される。

湘南箱根朴の会会員、坂井孝彦さんによる優雅な英訳で世界に発信された。坂井さんは「日本の心を世界に」をスローガンにして息の長い活動をされている。発刊には鍵山秀三郎氏始め多くの方の協力が結集した秀作である。（現在絶版となっているのは悲しい）1994年1月にはアメリカで評価され一部の中学校の教材となった。1996年1月当時の大統領クリントンから感謝の手紙が届く（前年小田原市セトプリントさんの協力でクリントン大統領に100冊寄贈した。その返事が届いた）

同じ月、1993年5月、岐阜県東海電子（株）に高さ11mの巨大な「念ずれば花ひらく」の碑が建立される。建立活動と朴ノ木を植える活動が全盛期となる。全ての働きは片山 克さんによる。

10, 1995年6月・真民さんは片山 克さんを全国朴の会会長に指名
11月「向上」に片山 克さんが取材され、記録された。「微光の一端」となったことが
証明された。

ドイツ語訳「タンポポ」が杉本省邦氏の手で出版され大学で教材とされた。

1996年1月にはミャンマーのアウンサンスーチーさん、カナダから、オーストラリア詩人
のシュマツツさんから、又ウイーンのミクリン教授からお礼の手紙がくる。

11, 1996年・「念ずれば花ひらく」カレンダー

1996年9月1日「詩国の朴」第106号に突然、次のようなお知らせが掲載される。

「ローヤル・株式会社イエローハットの来年のカレンダーは真民さんの直筆13枚と各詩と
全文を載せた「念ずればはなひらく」カレンダーになる予定で、目下調整中です」

こうして始まった真民カレンダーは10年間続いた。毎年の選詩と真民さんとの承諾交渉は
片山 克さん。それだけでなく

受注から納品までの気の遠くなる作業を片山 克さん夫妻がされた。毎年年末の1週間は
不眠不休の日が続いた。8年間カレンダーのお世話をして約130万円の在庫損失は全て夫妻
が負担された（田舞徳太郎さまも多額の援助をしてくださいました）残ったのは負債だけ
ではなかった。「あんたら、なんぼ儲けたんや」と
世間の風当たりは不当かつ強風であった。

あるとき、このことを知った真民さんが片山夫人と次のような会話が合った。

「あんた達夫婦が、吹聴されていることは知っている。しかし、私はそんなことを信じて
はおらん。あんたがたを心から信頼して感謝しているから、世間のことは気にするに及ば
ない」「ところで、奥さん、ようやってくれたね。有難いことです。何か所望することが
あれば言って欲しい」

絢子夫人は「それでは、畏れ多いことですが、一字
書いて頂きたい文字があります」

「ほう、それは何かね」

「私の母の名を『みち』といいますので『道』とお
願います」

「そうかね。一字でいいのかね」「はい、一字でお
願います」

「ほう、他の者は沢山の文字を言うがね。あんた
は、めずらしいことを言う」

「母の名前ですから」

真民さんは母には並ならぬ思いがある。しかし、一
字は書いたことがない。真民さんにはすこぶる難題



であったようだ。

書いて下さったのは前頁のような書であった。真民さんは万を越える文字を書いてきたがこの字は絢子夫人のところにしか存在しない独特の一文字である。真民さんは夫人の見えない苦勞を察知して、一字だけでは気が済まなかったようである。自分が大切にしていた記念の硯石を箱に入れて、「これで、あんたの俳句を書きなはれ」とプレゼントした。（カレンダー物語より抜粋）



1 2, 2004年2月・朴の会活動中止を全支部に通告

真民さん95歳「詩国」第500号をもって発刊を終結するに伴い片山 克さんの「詩国の朴」の発刊、全国朴の会の活動を中止することが通告された。実際は真民さんが「鳩寿」を発刊されたので「詩国の朴」は第214号迄続いた。全国朴の会の活動も第8回松山大会で終了した。

1 3, 2006年9月・真民情報の中断と片山 克さんへの風評

2006年9月から2008年12月（真民さん逝去）迄の公の情報は無い。非公式に伝わったのは片山 克さん夫妻にたいする風評であった。2006年9月小原は一人真民さんを病院に見舞った。そして風評の内容を「聞かされた」。「あり得ない、私が忘れればよい」と考えた。一方では「何故、出入り禁止になったのか分からない・あれや、これやと仮説を立てられる」。苦悶される片山 克さんとお会いするのは辛く疎遠になった。

1 4, 2016年12月27日・片山 克さんに電話をして親交再開

2017年1月初め、小原が風評の内容を伝える。片山さんの「死ぬよりも辛い苦悩」が始まる

1 5, 2018年・片山 克さんは「念ずれば花ひらく」の原点の深耕研究を再開、心理学、宗教学、仏典及び森信三先生の全著作を熟読して、2020年12月「念ずれば花ひらく」の原点は「念彼観音力」であるとの結論に至り

2021年1月から病と闘いながら執筆を開始された。未完に終わる。お会いする度に「念彼観音力」が彫り込められた碑の話をされ、建立者に感謝しておられた。

2021年7月25日「真民は偉大なり、真民は我が師なり、これに間違いはない」と言われ、

1 6, 2021年8月3日・絶筆は次の通り。絢子夫人が語られた。

しんじんなるいのり＝じっせんてつがく
もりしんぞうせんせい（ごみひろい）
かぎやまさん（おそうじ ベんじょ）

必死の絶筆であった。最後まで鉛筆とノートは枕元に置いていた。

おわりに

片山 克さんご夫妻の真民さんへの公私のお働きは真に多面で深くここに書き尽くすことはできません。残された膨大な資料を保管するために自宅の庭に書庫を建てられ、そこに所狭しと置かれている。朴の会会員とのやりとり等の手紙は全てコピーされており年代順に整理されている。

これらは真民研究家にとっては垂涎^{すいぜん}の一次資料となるでしょう。

私には、もう何もできない。ひたすらにご冥福をお祈りいたします。

小学校6年生の「平和への誓い」

2021/08/06

私たちには使命があります。

あの日、広島で起きた悲惨な出来事。

そのことを知り、被爆者の方々の思いや願いを聞き、考え、
平和の尊さや大切さを、世界中の人々や次の世代に伝えなければならないのです。

昭和20年（1945年）8月6日午前8時15分。

赤く燃え、真っ黒に焼け焦げてボロボロになった広島の町。

「兄が死ぬより、わしが死んだ方がよかった。」

大切な人が亡くなった悲しみと生き延びた者の苦しみには終わりがありません。

心に深く傷を負った被爆者は、それでも前を向き

「僕ら若人の力によって、きっと平和な世界を築き上げてみせる。」と決意しました。

悲しみや苦しみを抱えながらも、被爆者の方々は生きることを決して諦めず、
共に支え合い、広島の町の復興に向け立ち上がりました。

本当の別れは会えなくなるのではなく、忘れてしまうこと。

私たちは、犠牲になられた方々を決して忘れてはいけません。

私たちは、悲惨な過去をくり返してはいけません。

私たちの願いは、日本だけでなく、全ての国が平和であることです。

そのために、小さな力でも世界を変えることができると信じて行動したい。

誰もが幸せに暮らせる世の中にすることを、私たちは絶対に諦めたくありません。

争いのない未来、そして、この世界に生きる誰もが、心から平和だと言える日を目指し、努力し続けます。

広島で育つ私たちは、使命を心に刻み、この思いを次の世代へつないでいきます。

令和3年（2021年）8月6日

こども代表 広島市立袋町小学校 6年 伊藤 まりあ
 広島市立五日市東小学校 6年 宅味 義将

「忘れてしまうこと」とは無関心になること。

8月生まれの私には、どうしても書かなければならない、個人誌であっても残さねばならないことがある。6日、9日、15日の間に誕生日がある。今年は加えて8日が東京オリンピック閉会式があった。そしてCOVID-19が急速に最高値を更新している。

ベストピア7月号には次のように書いた。

「東京オリンピック2020の期間中には広島原爆被爆記念日があり、閉幕の翌日は長崎の被爆記念日がある。そして15日を迎える。戦争の勝ち負けではなく、戦争がもたらす悲惨さを繰り返さないとその日を記念日としている日本人の心を、日本人が自ら祭典に変えようとした。

毎年ささげられる原爆の日の子ども宣言「平和への誓い」には未来への希望が語られる。閉幕間際各種の競技は決勝戦に近づいている。その時、日本人の感情はどのように動いているのだろうか。閉幕の翌日の長崎の人々の気持ち、パラリンピック開催との谷間にある15日、総理大臣は与えられた原稿を公式通り読み上げることは分かっているが、その場の感情をどう現すのだろうか。鉄扉面無表情だけは見たくない。

ブレーキとアクセルを踏み間違えて、とてつもない悲劇を現実化しても「そんな意識はない」と言えるほどに人間には悔い改めは遠くなった」（ベストピア第413号より）

6日、菅首相は平和記念式典の挨拶で核心部分を読み飛ばした。

首相が読み飛ばしたのは以下の通り

「わが国は、核兵器の非人道性をどの国よりもよく理解する唯一の戦争被爆国であり、『核兵器のない世界』の実現に向けた努力を着実に積み重ねていく」

色々な擁護の理由がなされ、又批判もある。

この読み飛ばしは”偶然or必然”のどちらなのかは神のみぞ知る。本人は無意識であるから。言いうることは、飛ばしたところをディスカウントしたことである

広島市前市長の秋葉忠利氏は次のように語っている

「読み飛ばすかそうでないか、の問題ではなく、重要なのは、彼の心が単にそこになかった、ということだ。戦争犠牲者への関心がないし、新型コロナ感染で日本人に何が起きたかにも関心がない。台風や地震災害、その他の事でも同様だ。スピーチには悲劇、悲しみ今後人々にもたらされる痛みを自分の言葉で共有すると言う感覚が全くない」

9日の長崎の式典には1分間の遅刻をした。「トイレが遠かった」が理由のようであるが人、時、場を完全にディスカウントしている。

15日全国戦没者追悼式での挨拶は終始下を向いたまま緊張気味で原稿を読んでいる。鉄扉面は変わらない。

相手に意思を伝える立場にあるものには常識となっている有名なメラビアンの法則（言葉・7%、話し方・38%、表情・55%）を知らないのだろうか。

社会でリーダーの地位にある人には我々の総理大臣から学べることが多いことを知ってもらいたい。

若い人々が戦争の悲惨さ、残酷さを後世に繋ぐことを使命として尽力していることを知り少し心がなごむ。戦争体験者の高齢化が進むなか、語り出してくださる人も増えている

朝日新聞2021/08/14朝刊より

（声）語りつぐ戦争 特攻待機の兄、帰還後は沈黙守る

主婦 小嶋洋子（長崎県 87）

戦時色も濃くなった1945（昭和20）年、予科練生だった次兄の「首席で卒業した証しの銀時計を送った」との報が隊から届き、やがて出撃も近いことも知りました。

私た家族は特攻隊員としての、お国へのご奉公を仏前に祈るのみでした。

しかし、銀時計も届かず、戦死者の公報もなく終戦を迎え、兄は帰還して参りました。出撃直前の飛行機のエンジン故障で、数カ月の待機となり、それが他の友との運命を分かちました。

我が家に帰った兄は、火鉢の前に座する父へ、長い時間、許しを請うてこうべを垂れていました。父は村長として多くの若者を戦地に送り出し、多くの戦死者もいました。息子の帰還をただ黙し、ひと言の言葉もかけませんでした。

数日後、兄は隊から自害用に持たされていた手榴弾（しゅりゅうだん）を手に山に入り、湖で爆破したと知りました。どんな思いで山へ、湖へ行ったのか知るよしもありません。

村長の名の下で戦争へ加担した父、命捨てるのが本望とたたき込まれたのに残った兄。語らずに逝ってしまった2人ですが、胸中は計り知れぬものが終生あったと思います。

（声）語りつぐ戦争 12歳の夏、死に場所を覚悟した

無職 梅林陽（千葉県 88）

終戦の年、私は12歳だった。北陸・金沢で生まれ育った私は、虫歯の治療がうまくいかずに重い骨膜炎となり、7月、手術した。

8月1日夜、金沢上空をB29の編隊が次々と通過した。富山への空襲だった。「金沢も危ない、疎開を」と言われたが、私はガーゼと包帯を替えてもらうため、毎日病院へ行く必要がある。妹だけ、父の縁を頼りに疎開した。

新型爆弾の被害情報がもたらされ、「空襲に遭っていない主な都市はもう京都と金沢しかない」。そんな話が伝わると、軍国少年で将来は海軍兵学校へ行き、飛行機乗りになると意気込んでいた私はすっかり気がなえて、新型爆弾が金沢に落ちたら、あの川にはまって死ぬのだろう、と思い描いた。

今も8月になると、その時のことを思い出す。12歳の少年に自分の死に場所、死に様を思わせ、覚悟させた戦争のむごさを思う。指導者や政治家は戦争の正義や大義を唱えるが、庶民にとって戦争は地獄以外の何物でもないをつくづく思うのである。

個人誌の使命は、発行者の見地からの情報を残すことである。個人がいくら何を主張しても世に通じることはない。ただ後世、歴史を学ぶ人には個人誌は有益である。何を選ぶかは、私の価値観による。真逆の情報もあるが、その時は詳細な反論を書く。同調の情報は「生」で伝える。私はそのように考えて個人誌を続けている。

次ページからパリ通信です

パリ通信 第116号

日本入国の水際対策

ワクチン接種が義務付けられたフランス、接種率は8月15日で人口の66,8%に達した。夏休み真っ最中、海や山のバカンス先でも予約なしでワクチン接種が可能、一回目と二回目の接種地が異なっても良くなった。ワクチン接種が進む反面、予想通り、「衛生パス」義務化反対デモが活発化している。毎週土曜日の恒例となった「黄色いベスト運動」デモと

重なり、ワクチン接種義務は個人の自由を侵害する拘束との理由で反対の声が上がっている。異変ウイルス・デルタ株の感染力が強く、フランスでも一日の新規感染者数が急激に増加し、外出時マスク着用義務が再び適用されている地方が多い。

そして8月9日からいよいよ「衛生パス」実施が始まった。ワクチン接種証明または72時間以内のPCR検査陰性証明がなければ、飛行機や列車のみならず、カフェ、レストラン、スポーツジム、ショッピング・センターなど日常生活の場所に行けなく

9/11ページ



なった。ワクチン接種を拒否する人はPCR検査を受け続けるか、社会生活を断念するかの窮地に陥っている。

フランスも日本も予測できないコロナ禍の推移に振り回され、フランスから日本への帰省も大変なことになった。入国時の水際対策は頻繁に予告なしで変更される。8月の日本帰国を決めた時からパリ日本大使館領事部に連絡し、日本厚生労働省ホームページを頻繁に見て、最新の情報に沿って帰国準備をしなければならない。最新情報でなければ日本入国が拒否される事態にもなりかねない。

私の実家は九州で、国内線や新幹線は利用できない。パリから24時間で実家まで移動できていたコロナ禍以前から一変して、一週間を要する帰省となった。

出発前の準備として「帰国便搭乗時刻の72時間前のPCR検査陰性証明」を取らねばならない。検査できるラボや病院は多いが、採取時間、結果判明時間、検査の方法、検査機関の住所、医師のサインなどを記載する日本厚生労働省指定証明書でなければならない。PCR検査採取日と陰性結果を元に日本用証明書に書き換える日と二日を要する。

次に日本厚生労働省が指定する「新型コロナウイルス感染症対策 質問票回答受付」のQRコードをダウンロードする。

また、「誓約書(個人)」の最終版(2021年7月15日更新)をダウンロード・プリントアウトし、日本での自己隔離待機場所、空港から待機場所までの交通手段などの事項に回答し、サインをして誓約書を準備する。

次に「入国者健康居所確認アプリ(MySOS)」をダウンロードする(日本到着後、検疫所でもダウンロードできる)。アプリをダウンロードできるスマートフォンがない人は自己負担でレンタルを強制される。スマートフォンで本人の位置情報を確認するのである。

さらにもう一つ「接触確認アプリ(COCOA)」のダウンロードも必要だ。

以上の準備を済ませてパリ・アムステルダム・大阪の乗り継ぎ便で帰国したのが8月12日午前8:50だった。

パリ・アムステルダム便は満席だった。ヨーロッパ内はワクチン接種パスだけで飛行機に乗れる。アムステルダムから大阪行きの乗客は少なかった。日本入国条件を思えば当然だろう。関西国際空港に着陸してからの水際対策が長かった。唾液を採取するPCR検査を受け、結果が出る待ち時間に必要証明のチェック、アプリ・インストールのチェックなどが行われ、無罪放免で到着ゲートを出たのは午後だった。

大阪から九州まで豪雨の中を家族の自家用車で移動した。実家に到着したのは翌日で、メールを開いたら以下のお知らせが届いていた。

在留邦人の皆様

フランスに滞在中の皆様

8月14日0時以降にフランスから日本に入国する場合、検疫所長が指定する場所（検疫所が確保する宿泊施設）での3日間の待機（到着日は含まれません）と3日目の新型コロナウイルス感染検査が求められます。3日目の検査を受けて陰性と判定された場合、検疫所長が指定する場所を退所し、入国後14日目までの間自宅等で待機が求められます。出発72時間以内の陰性証明書の取得など、これまで求められていた日本入国時の防疫措置は、引き続き求められますので、以下のウェブページにてご確認ください。厚生労働省『検疫所が確保する宿泊施設での待機・誓約書の提出



について』（8月11日改訂）https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000121431_00249.html

外務省 『水際対策強化措置に係る国・地域の指定について（8月11日付）』 <https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/100221453.pdf>

到着が48時間遅れていたら「空港近くの場所で4日間留置」だったと知り、幸運に感謝した。7月14日に逆戻りした措置で、日本での感染者数が増えたせいだろうか。理由はいつもよく分からない。はっきりしているのは、これから14日間は実家から一步も外へ出られないこと。毎日「MySOS」アプリから「現在地報告(位置確認)」ボタンを押す旨のメッセージが2-3回は送られてくる。顔認証の本人確認ビデオ録画も無作為に毎日実施される。「健康状態報告」も毎日行わなければならない。アプリに管理される14日間だ。納得できないことも多々あるが、高齢の父が帰省を喜んでいるのが救いである。